

最初に確認できる進上の例は、同治12（1873）年閏6月7日付けで行われた美里親方・富川親方による庭石御用のための献上で、その後、同治13（1874）年1月ごろまで続々と石灯籠や手水鉢、溜池などが贈られている。これらは、中城御殿の大御殿や御書院、御内原などの工事の進捗と連動して行われたとみられる。

また、もっとも多くの人びとがかかわったのが、すべての工事が完了した同治13（1874）年11月付けの「覚」によるもので、22名が庭木などを進上している。このことについて、御用に役立つことから植え付けているので進上として認めて欲しい、との添え書きがなされ国王に報告された。進上した人びとにはその後、返礼品が贈られ、このことは11月の「覚」でソテツ1株を進上した貝姓福地家の家譜仕次（七世唯延の条）にも見え、光緒元（1875）年3月8日付けで「国分煙草式斤」を受け取っている（『那覇市史 資料篇第1巻12 近世史料補遺・雑纂』那覇市役所、2004、198頁）。

これらの例は、大規模な御殿の造営が王府財政で賄いきれず、献金や進上などの民間・高位の社会層からの動員・提供などがからみあいながら進められたことを示している。

参考文献

- ・球陽研究会編『球陽』角川書店、1974年
- ・高良倉吉「尚泰王末期の風水動向の一端」『琉球大学法文学部紀要 琉球アジア文化論集』4、琉球大学法文学部国際言語文化学科琉球アジア文化専攻、2018年
- ・法政大学沖縄文化研究所『沖縄研究資料27 旧記書類抜萃・沖縄旧記書類字句註解書』、2010年
- ・琉球王国評定所文書編集委員会編『旧琉球藩評定所書類目録』浦添市教育委員会、1989年
- ・「貝姓福地家家譜仕次」『那覇市史 資料篇第1巻12 近世史料補遺・雑纂』那覇市役所、2004年
- ・『中城御殿御敷替御普請日記』（尚家文書501号、那覇市歴史博物館所蔵）
- ・『中城御殿御敷替御普請日記』（尚家文書502号、那覇市歴史博物館所蔵）
- ・『中城御殿御敷替御普請日記』（尚家文書503号、那覇市歴史博物館所蔵）
- ・『同治十年 中城御殿御普請二付百姓中面立帳』（沖縄県立図書館所蔵）
- ・『同治十二年 中城御殿御普請二付御石御材木持夫出帳』（沖縄県立図書館所蔵）

第2節 近代期の中城御殿に関する文献資料

（1）沖縄県設置直後から旧慣期の中城御殿に関する文献史料

1879年の廃琉置県処分後、首里城は日本陸軍熊本鎮台分遣隊に接收され、尚家は中城御殿への退去を余儀なくされた。同年5月に最後の国王尚泰は東京へと移り、その後尚家の当主は東京の尚家邸を拠点とし、中城御殿は沖縄尚家邸として利用された。近代を通して、中城御殿は沖縄での尚家家政の中心、および聞得大君をはじめとする尚家祭祀の中心として機能した。

なお、首里城から中城御殿への尚家退去については、尚順「首里城明渡しの思い出」に、「騒然とした人々のざわめきと、明るい篝火と、暗い夜空と、そうした中を、乳母に背負われて中城御殿にはいった記憶がある。中城御殿は御座敷から廊下まで一杯の人であった。私を背負った乳母が通れない位の人であった。私はその人々の間に、乳母に背負われたまま暗い廊下の隅に立ちつくして、あちこちに聞こえる嗚咽を夢のように聞いていた」（『松山王子尚順遺稿』5～6頁）と記されている。また、真栄平房敬『首里城物語』には、著者が関係者や首里の古老たちから聞いた話を中心に当時の様子が記録されている。

新県への抵抗拠点としての中城御殿 首里城を退去した尚泰は、病気を理由に政府の上京命令に対して度々延期を要請するが、1879年5月18日松田から尚泰へ次のような通知文が渡される。

病氣之趣被 聞食今般御見舞トシテ宮内省御用掛陸軍少佐相良長発、侍医高階経徳ヲ被差遣候ニ付、今日午後三時拙者（松田道之）同伴、其邸へ参入候條此段申入候也（『琉球見聞録』133頁）

宮内省から派遣された高階経徳の診断結果をもって再度上京の督促がなされ、6月上旬に尚泰は上京することとなった。この尚泰上京をもって松田道之は琉球での任務を終え、帰京する。同年3月から約3か月にわたる「御処分（廃藩御処分）」の後半は、中城御殿が日琉当局の駆け引きの場所となっていた。

喜舎場朝賢『琉球見聞録』には、「毎日中城殿に聚会せし旧衆官吏は、松田の命令を辞絶し、国中人心一致して義を守るの方法を講議す」（『琉球見聞録』132頁）との記述もみられる。旧王府士族は中城御殿や大美御殿へ集まり県庁への抵抗拠点として利用していた。しかし、県当局の方針が説得から警察力の行使へと変化し、1879年9月に三司官富川親方らを中心に県庁へ恭順を示し、県内部での抵抗運動は鎮静化する（前田2016）。ただ、「東汀隨筆」によれば、廃琉置県の10年後も頑固党の人々を

中心に中城御殿や周辺の屋敷に「国家を中興せんことを謀る」人々が集まっていた。

新県庁候補地となった中城御殿 置県直後、県当局はそれ以前に内務省出張所として使用されていた旧薩摩在番奉行所をそのまま県庁として使用していた。ただ、狭隘などの問題から当初より新県庁舎への移転の話が挙がっている。当初の政府方針では、県庁を首里へ置くことになっており、中城御殿はその有力な候補地のひとつであった。県庁新築に係る沖縄県から政府への伺には次のような記述がみられる。

沖庶第六拾七号

沖縄県々庁位置及新築之儀に付伺

沖縄県々庁設置ノ為、同県下首里中城殿買上方及那覇へ新築等ノ儀、曩ニ該県令ヨリ屢々申出ノ趣モ有之候処、抑首里中城殿ト唱フハ従前尚泰嫡子ノ邸宅ニシテ、已ニ客歳薩藩御処分ニ際シ、旧城ヲ陸軍省ヘ引渡候砌、尚泰ノ家族等、此処ニ引移、爾後続テ居住ノ者アルヲ以、今若シ之ヲ買上引払ハセ候トキハ、大ニ人心ニモ関係シ、然ル可カラス。(中略)首里ニ在テハ中城殿ヲ除キ他ニ官庁ヲ設クヘキ適当ノ場所無之、加ルニ同地ハ施政上諸般便ナラサル趣。

「沖縄県県庁位置変更並新築の件」(『沖縄県史』12巻、486～490頁)

当初の計画では、首里に県庁を設置する予定であったが、適した場所が中城御殿しかなく、すでに尚家の人々が生活しており、これを無理やり召し上げては人心にも影響が出ることとを考慮し、那覇へ新築する方針が取られた。これ以前に提出された鍋島直彬沖縄県令から松方正義内務卿への「本庁位置並新築ノ意見上申」によると、中城御殿接収に関する具体的な過程が浮かび上がってくる。

彼中城殿ト唱フルモノハ、其地位構造モ直ニ県庁ニ用ヒテ相応ノモノニ有之候得共、尚泰家族尚オ居留スル者アルヲ以テ、遽ニ之ヲ使用スル訳ニ至リ不申。因テ已ムヲ得ス、一旦大美殿ト唱フルモノヲ以テ県庁ニ充テサレハ、他ニ用ユヘキ家屋之レ無キ所ヨリ、其段上申爾後該所ノ実況猶精密検閲候ニ、其方位ハ正面支路ニ面シ、地形凹下湫隘大道高クシテ、殆ント其楼頭ト均シク築雑ハ頗ル堅牢ナレトモ、矮卑狭小県庁ト為ス可ラス。右之次第ニ付、尚泰家族ハ終ニ上京スヘキモノニ付、夫迄ノ処ハ大美殿ニ移住致サセ、中城御殿御買上ケ御下渡シノ義上請候処、人心ニモ閑ス可シトノ御懸念ニテ、右上申書、御却下相成。

この上申からも中城御殿の場所や規模が県庁に適して

いたことが記されているが、すでに尚泰の家族が居住していることが懸案事項として挙げられている。中城御殿を買い上げる際は、尚家の人々大美御殿へ移住させる案も挙げられているが、新県統治が途に就かない状況の中で、旧士族層をはじめとする人々の「人心」への影響を懸念し、この案は却下となった。結果的には、首里には中城御殿の他には適地がなく、当初の政府方針を変更し、那覇に新築の県庁を建てる方向でまとまった。

視察記録にみる旧慣期の中城御殿 尾崎三良参事院議官補は、明治政府が実施した巡察(各地の治績と民情視察)の一環として1882年に沖縄へ派遣された。尾崎の視察結果は「沖縄県視察復命書」として政府へ報告された。尾崎は沖縄視察中に中城御殿を訪れており、視察の関連資料に記述がみられる。尾崎三良「琉球行日記」には「中城殿ニ至リ尚氏家扶阿河(ママ)根親雲上ニ面会ス。中城殿ハ尚氏家族ノ住居ナリ。尚泰祖母(八十有余ト云)妾四男十才一女十四才并ニ男女ノ従者凡ソ五十名計リト云」(『沖縄県史料』近代3)とあり、また、『尾崎三良日記』には「旧藩王祖母当年八十九才、日夜尚泰ヲ望ミ号泣ス。仰願クハ朝廷寛仁ノ御沙汰ヲ以テ一度帰島、母子生前ノ面会ヲ相叶候様、臣民一統嘆願云々」(211頁)と記されている。

1886年に沖縄視察を行った内務大臣山県有朋は、視察の「復命書」と日誌『南航日記』を1886年5月28日に閣議に提出した。視察中に山県は中城御殿において尚家による饗応を受けている。管見の限り、近代沖縄において政府高官などの要人が中城御殿にて饗応を受けたのは山県が最初と思われる。饗応の様子を山県は次のように記録している。

五時首里ニ至リ中城尚典氏ノ饗宴ニ赴ク。中城ハ旧藩世子邸ノ名ナリ。北邊ノ要地ニ中城間切アリテ世子ハ必ス此地ニ対スルヲ以テ、今猶尚典ノ邸ヲ称スルニ中城ヲ以テス。中山有名ノ建築ニシテ、木材ハ皆薩州産ヲ用ユ。四面各六十間、周囲ハ美石ヲ以テ墻ト為シ、左右ノ路ハ白垂土ニテ之ヲ堅メタリ。玄関ヨリ屈曲シテ書院ニ入ル。天井甚高ク梁上凡八尺、中ヲ三十六疊トシ、左右ニ二重ノ縁通リアリ。室中壁無ク、只屋久杉ノ板戸アルノミ。床ノ間ニ狩野氏三幅対ノ書ヲ掲ク。座ハ極テ柔軟ナル琉球畳ノ上ニ赤毯ヲ列ス。戸障子ハ皆開放シ、火鉢ヲ用イスシテ、烟草盆ヲ置ク。軒ニハ内地ノ提燈ト、天狗燈トシテ交互シテ懸ケタリ。天狗燈ハ細竹ヲ以テ骨トシ、紙ヲ張ラサレトモ、風ヲ透シテ、火ヲ滅セス、燭台ハ極テ高ク内地ノ燭台ヲ點シテ心ヲ切ラス。庭ハ鹿兒島松ヲ栽エ、白珊瑚砂ヲ敷ク。尚典及ヒ宗族伊江、今帰仁以下五六名接待シ、按司、親方等十数人其席ニ列ス。饗応ハ琉球ノ貴客ニ供スル上等料理ナリ。膳碗ハ皆内地ノ黒漆ニテ、

皿ノミ陶器ヲ用ユ。酒ハ丹釀ヲ供シ、中間ニ享保年中釀ス所ノ古焼酎ヲ薦ム。席上ノ余興ニ琉人書画ノ揮毫ヲ為ス。配膳人ハ旧門閥ノ子弟数十人ヲ使用シ、一婦人ヲ出サス、茶菓酒饌ヲ供スルノ次第并迎送ノ礼節等、総テ小笠原流ノ様式ヲ用イ、極テ鄭重ナリ。帰路ハ三巴ノ徽章アル箱提燈ニテ送テ那覇ニ至ルヲ礼トス。然レトモ、路ハ降り車ハ疾キヲ以テ尽シ及フ能ハス。館ニ歸ル方二十時ナリ。(山県有朋「南航日記」)

「南航日記」の記述では、中城御殿の来歴や建物内部の様子が述べられ、その後に饗応の詳細が記されている。尚典ら尚家関係者と旧按司・親方クラスの人々が列席し、「饗応ハ琉球ノ貴客ニ供スル上等料理ナリ」「酒ハ丹釀ヲ供シ、中間ニ享保年中釀ス所ノ古焼酎ヲ薦ム」とあるように琉球料理や古酒による「琉球式」の饗応が行われたものと思われる。

内務書記官の一本喜徳郎は、1888年に沖縄での現地調査を行い、その調査結果を『一木書記官取調書』という報告書にまとめた。中城御殿については、「(3) 民心の帰向」において「黒党白党ノ目下ノ状況ニ関シ警察ニ於テ探知シタル所左ノ如シ」として新県統治に抵抗する頑固党の活動に関連した記述中にみられる。

尚氏ノ経済ハ如何ナル陥ルヘキカ、逆メ賭ルヲ難シトセス、尚氏ニシテ、若シ其財産ヲ消尽スルニ至ラハ、沖縄士族カ今日時勢ニ対シテ懷ク所ノ不平ハ一層其気焰ヲ増長スルニ至ルヤ鏡ニ懸ケテ見ル如シ。然レトモ尚氏経済ノ状態ニ関シテハ旧臣中一二憂慮スルモノナキニ非サルモ、多クハ自家ノ地位ニ恋々タルノ情君家ヲ思フノ情ヨリ強ク進テ人員ノ淘汰ヲ勧告スルモノナク、尚氏モ亦幼少ノ時ヨリ左右ニ近侍シタル旧臣ヲ淘汰シテ改革ヲ断行スルノ勇気ナク、君臣相携ヘ深淵ニ向テ漸ク歩ヲ進ムルノ趣アリ、新ニ事業ヲ起スニ当リテモ事業ノ興廃ヨリハ、寧ロ各自ノ地位ヲ作ルニ汲々タル者多ク、事業費ノ割合ニ役員俸給等ノ額過大ナルノ感アリ。之ヲ要スルニ尚氏家政ノ紊乱ハ其将来県治ニ影響スル所少ナカラス。而シテ尚氏ノ経済ヲ整理スルニハ、一家ヲ挙ケテ東京ニ移住セシムルヲ得策トス。是固ヨリ強制ヲ以テスヘキニ非スト雖トモ、尚氏一家ノ重立タル者ニ宮中ノ相当官位ヲ授ケラル、カ如キ恩典アラハ、一ハ沖縄県人ヲシテ皇恩ノ優渥ナルヲ感セシメ、一ハ尚氏ヲシテ其居住ノ中、真ヲ東京ニ移シテ経済ノ紊乱ヲ防キ、旁沖縄ニ於ケル陰謀巢窟ヲ清掃スルノ効ナキニ非サルヘシ

(『沖縄県史』14巻、501頁)

この「取調書」中では、悪化する尚家の経済状態について懸念を示し、新事業を行っても旧臣への付度から根

本的な改革には至らず、現状のままでは悪化の一途をたどる一方であるとの見方が示されている。一本は尚家家政の「紊乱」を整理する方策として、沖縄に残る尚一家の全面的な東京移住を挙げている。経済面をその主な理由に挙げているが、引用文の最後には「旁沖縄ニ於ケル陰謀巢窟ヲ清掃スルノ効ナキニ非サルヘシ」とあるように、頑固党の活動にくさびを打ち込み、その拠り所としての尚家と引き離そうとする狙いも見受けられる。

(2) 新聞資料にみる中城御殿

1893年に創刊された、近代沖縄の最初のメディアである『琉球新報』に、中城御殿に関連する特徴的な記事があるので、それを抜粋して紹介する。

「西島師団長の沖縄視察談」琉球新報 1907(明治40)年5月28日

旧藩主の邸を訪ふたのだが、予か行くと直に家扶などの人々が迎接せられ、二分間ばかり経つと、当主尚典侯が羽織袴で出迎へられた。而して三十畳敷ばかりの大広間にて面接した所が却々丁寧な方で非常に歓待されたれど、侯爵には内地語かお判りないので家扶の通弁で種々談話を交換した。家屋などは却々立派なものだ。四五尺もある一枚板の屋久杉の建具を建ててある。何しろ琉球は昔から守礼の国と云つて礼儀を重んずる土地であるから現今でも礼儀応答は頗る鄭重なものである(鹿児島新聞所報より転載記事)

『鹿児島新聞』からの転載記事であるが、西島助義の沖縄視察談のなかで中城御殿での応接について触れられている。この時は当主の尚典が自ら応対したようである。

同年8月15日には「尚泰侯七周年忌祭典の次第」という記事が『琉球新報』紙上に掲載されており、中城御殿を中心に実施されたことがわかる。

次に1908年11月15日の『琉球新報』に掲載された「首里那覇の一日」は、学校生徒の遠足の一環として中城御殿を参観した記録である。記事中では、「尚家参観の際は、家扶伊是名、大山、嵩原の諸氏接待せられ同邸大広間に於て茶菓の饗応あり斯くて邸内重なる場所を巡覧するを得たるは、一同の歓喜措く能はざる所ありき。一行この得かたき歓待に時の遷るを知らず赤陽将に西海に白かんとするの頃、深く謝して首里女子部に至り白井校長の案内にて園内を一周し応接所に於て茶菓の饗応に預りたり」と参観の様子を記録している。

閑院宮来訪の記録 1910年12月、閑院宮載仁親王夫妻は沖縄を訪れた。来訪前から尚家邸での奉迎準備が詳細に報じられている。

尚侯爵家の奉迎準備（『琉球新報』1910（明治43）年12月15日）

閑院宮同妃両殿下御来県を給ふと県下五十万臣民の感泣措からざる所にして、老幼婦女一人として奉公忠誠の微軫を捧げ奉らん為め全心全腹の歓□を以て奉迎の準備怠りたるものとは之れなし。殊に県下五十万民衆の□（（代カ））表としては、尚侯爵家あり。両殿下が同家に御立寄の光栄を給ふと承りたるより、同家に於ては上下を挙げて奉迎準備に着手し、廣き屋敷の大掃除を行ふやら戸障子縁側の手入検分に至るまで細心を盡し、聊かたりとも非礼に渉る□のことありては、家門の一大事なりとて家扶伊是名氏は、熱心極めて奔走せり。聞く所によれば、右屋敷内の諸手入□一ヵ月以前より多数の雑仕を入れて行ひたる由にて、尚典侯爵折柄病中にありたるに屢々家扶家従等と呼び寄せ厳に訓諭を加ふる所ありたりと

そして、この5日後の『琉球新報』12月20日の記事では、閑院宮夫妻が尚家邸を訪れた際の詳細が報じられている。

侯爵家へ御成 尚家に於ては両殿下（閑院宮載仁親王、知恵子妃）は中門より広間へ成らせられ随従の人々は何れも表玄関より次の間に入りて休憩す。両殿下には侯爵家の公達□景、尚暢其他侯爵令妹及び伊江朝助氏、家扶伊是名氏等へ拝謁を仰付けられ侯爵及び婦人は濱別荘の病静中にあるの故を以て伊江男爵及び尚男爵夫人之□代理として御接待の役に掌る、宮殿下には伊江男爵に向はせられて「侯爵は今何れ□」などの御言葉を掛けさせられ日比知事、伊江男爵との間には絶えず邸宅の建築、本県の気候等に関する御談話あり、両殿下には則ち侯爵夫妻への御土産として紅白の縮緬二匹を見事な御紋付の台に載せられた□鄭重なる御下賜品あり。約二時間程御休憩ありて御昼餐を終へさせられ、午後三時頃御出発あらせらる。御出発に当り廊下に於て静かに伊江男爵を顧みられ「侯爵に宜しく、病気を大事にするやうに」とのいとも有難き御言葉ありて庭上に出でさせられ両殿下とも書院の庭に台臨あらせられた物見に上らせられたる後に侯爵家の令息令嬢及び近親の人々の奉迎に対して一々鄭重なる御会釈を賜はりて侯爵邸を出でさせられ颯爽たる御英姿、群衆仰瞻の間を車輪静かに轢りて町端邊りより綾門に出で数千の奉迎者両側に整列せる間を…

療養中の当主尚典に代わり伊江朝助を中心に中城御殿での応接が行われた。記事によれば2時間程度の滞在であったが、休憩と昼餐をとり、中城御殿を後にしたようである。綾門大道付近には「数千の奉迎者両側に整列せる」とあり、皇族の来沖という一大事であったことがわ

かる。同紙面には、「尚侯爵家御昼餐の給仕人」という見出しの内容もあり、昼餐の給仕役を県立高等女学校と女子尋常高等小学校の教員・生徒が務めた。翌12月21日に「両殿下御登艦」の記事が掲載され、閑院宮夫妻は沖縄を経た。この時が初の皇族の来訪記録であったが、『旧中城御殿関係資料』によれば、この後1921年3月4日に皇太子として後の昭和天皇が中城御殿を訪問しており、1926年5月28日には秩父宮、1927年2月28日に高松宮が来訪している。前述した山県有朋など政府高官や皇族、知識人をはじめ沖縄を来訪した要人を饗応する「迎賓館」としての役割が、これらの事例から見受けられる。近代特有の中城御殿の役割と言えよう。真栄平房敬によれば、「昭和天皇が皇太子の時に中城御殿をご訪問されました。その際大広間は洋間につくり替えたのです。すぐ一晩で、首里中の大工を総動員してそれを作ったそうです。首里の大工は突貫工事だったと言っていました。大広間は畳の所は引っ込んでいて、そこをにわかに洋間にするために、板畳みたいなものをつくり重ねて床面をあげました。床面を全部敷居の高さにしてその上から絨毯を全部敷きました。天井は綺麗なシャンデリアで、金属の所は真鍮でした。皇太子がいらした時に障子はガラス戸に替えられたそうです」（『旧中城御殿関係資料』）とあり、要人の来訪を機に建物内部の様子が変化していることがわかる。

この他、新聞記事には「尚家の骨董品陳列」（『琉球新報』1911年8月30日）など尚家の家政や沖縄県内での動向と関連する記事が散見される。県外紙も含めた悉皆調査が今後の課題である。

（3）その他：「尚家文書」、回想等に見る近代の中城御殿 尚家文書にみる尚泰・尚典の葬儀

最後の琉球国王である尚泰は、1901年に東京で死去する。当初は他の華族と同様に東京で葬儀を行う方向であったが、尚家関係者や沖縄側からの働きかけにより、沖縄（首里）にて葬儀が行われ、同年8月29日に玉陵へ葬られた。尚泰の葬儀に関しては、当時の新聞の他、尚家文書に尚家文書38「明治三十四年八月 従一位侯爵尚泰様御葬儀係方日誌 全 共十四冊（朱書）」、尚家文書39「明治参拾四年八月二十一日 従一位様被遊薨御候時自御中陰中御百ヶ日迄金錢請拂簿 共十四冊（朱書） 用度係」、尚家文書40「明治三十四年八月 尚泰様薨御之御時 有禄士族并無禄士族より献納之御祭文御殿日記 共十四冊（朱書）」、尚家文書41「明治三十四年八月 尚泰様被遊薨御候ニ付工事及加治御葬具仕立仕様書 共十四冊（朱書） 仕立物方」、尚家文書42「明治三十四年八月 尚泰様薨御之時御行列方日記 共十四冊（朱書） 御行列係」、尚家文書43「明治三十四年八月十九日 尚泰様被遊薨御御葬送

ニ付御殿御祭文係方日記 共十四冊（朱書）」、尚家文書 44「明治三十四年八月 従一位尚泰様御葬送之時御献立帳 共十四冊（朱書）」、尚家文書 45「明治三十四年八月 従一位侯爵尚泰様被遊御薨候付日記 共十四冊（朱書）御前卓方」、尚家文書 46「明治三十四年八月 尚泰様薨御付御中陰方調物帳 共十四冊（朱書）」、尚家文書 47「明治三十四年八月 尚泰様薨御ニ付御葬具仕立仕様書 共十四冊（朱書）仕立物方」、尚家文書 48「明治三十四年八月 尚泰様薨去ニ付御座構并御掃除方日記 共十四冊／（朱書）」、尚家文書 49「御葬具圖帳一冊 共十四冊（朱書）」、尚家文書 50「明治三十四年八月 尚泰様薨去ニ付勅使様御接待并御會葬者接待係方 日誌 共十四冊（朱書）」、尚家文書 51「明治三十四年 仙徳様 賢室様御安骨日記 共十四冊（朱書）」などの史料が残されている。また、藤本仁文と田丸尚美による論稿においても詳細に検討がなされている。8月28日の朝に那覇港へ到着した尚泰の遺体は、そのまま中城御殿へ移送され、葬儀の日まで御寝廟殿へ安置された。御寝廟殿は、もともと首里城内の御寝廟殿に安置されていた先代国王の位牌（尚円王以降）が保管もしくは祀られた空間であった。

尚典は最後の国王尚泰の長男で、最後の中城王子（世子）であった。1901年、尚泰の逝去により侯爵を引き継ぎ、1918年に従二位に叙せられ、1920年9月22日に逝去した。尚典の葬儀については、いくつかの写真資料が残されているが、まとまった文献はみられない。この写真を手掛かりに伊集・鈴木論稿では、葬列のルートが尚泰の時と同様であったと想定している。そもそも、尚典は亡くなるまで中城御殿にて療養中であった。中城御殿を発した葬列は、歴代国王の眠る玉陵へと向かい、一連の葬送が行われた。なお、尚典の長男で次の尚家当主となった尚昌は、玉陵ではなく東京で葬られた。

尚泰と尚典の葬儀以外の内容において、尚家文書から見てくるのは近代尚家の人事である。尚家文書 1065「明治三十年西 日記 外事課」には、尚家財政の逼迫に伴い、東京尚家邸、中城御殿、大美御殿など尚家の所蔵する施設での人員整理に関する内容が記録されている。尚家版の「家政改革」のなかで、中城御殿の人員も削減された。近代の尚家文書「日記類」には、東京尚家邸と沖縄尚家邸（中城御殿）との間での人員の行き来が頻繁に記録されている。今後の課題となるが、1872年の琉球藩期以降の東京―沖縄（琉球）間での人員の異動について総合的にまとめたうえで、明治後半の「家政改革」について詳細を明らかにする必要がある。

関係者および来訪者の回想 「首里城尚家関係者ヒアリング調査業務報告書」は、首里城や尚家の生活、祭祀、建築空間等について記録を残すため、2004年度、2009年度、2010年度の3カ年度にかけて4名の関係者と文献調

査の結果をまとめた報告書である。第一章「尚家の人々」では、尚泰以降の尚家関係者のプロフィールや、中城御殿での生活の様子などが記録されている。とくに、中城御殿において尚家の神事や家政をとりまとめた松川御殿（尚泰夫人）、野嵩御殿（尚典妃）、安室御殿（尚泰子女・最後の聞得大君）、今帰仁御殿（尚典子女・今帰仁延子）の記述からは、中城御殿での日々の生活や祭祀の実態が窺える。第二章「王家の生活空間」では、中城御殿建物全体図とともに知名茂子へのヒアリング調査による「中城御殿 御内原各室間取」が示されており、御内原部分の細部まで理解することができる。また、御寝廟殿御殿や御二階御殿など建物ごとの調査報告では、内部の様子、利用の実態、祭祀等での利用状況が窺える。明治末の聞得大君御殿の払い下げにより、祭神は中城御殿の御二階御殿の二階へと移され聖域となった。つづく第三章「王家につたわる諸道具」、第四章「王家の祭祀儀礼」では、中城御殿に保管されていた祭祀具や、明治以降に首里城から引き継がれた祭祀について詳細が記されている。「県社のまつり（10月）」の項目では、「県社のまつりでは町ごとに旗頭をたて、行列も行われた。中城御殿では、野嵩御殿たちが中城御殿の物見から簾越しに、子供達は石垣の上にゴザを敷いて行列を見学した」とある。

この他、尚家関係者による中城御殿の回想記録については、井伊文子『わがふるさと沖縄：琉球王尚家の長女として生まれ』（春秋社、2002年）に詳しい。本書には井伊の回想と合わせて、歌文集「中城さうし」が収録されており、中城御殿を詠んだ歌も多く含まれている。さらに、井伊は戦後1972年に出版した『仏葬花燃ゆ』において、「昭和三十四年戦後はじめて帰省した折、この石垣がほんの僅か残るのみで爆撃のすさまじさが思いやられ、想像はしていたものの無然としてしまった。屋敷跡の一隅に那覇市役所の支所の粗末な建物が建っていて、二月末だったが支所長と挨拶をかわしつつ、窓外の青々と繁った梅の葉が妙に生々しく目にうつり今でも忘れられない。」と回想している。また、1933年に帰省した際の回想には、「上の御殿」に関する回想も含まれており、「井戸のある場所のすぐ近くが高みになっていて上の御殿といい、当時誰も住んでいなかった。此処に更に小高い岩の部分が榕樹の巨木の根につつまれ、傍らに石段を設け上に登れるようになっていた。尚家の拝所で上の平な場所に祠などは無い。高い台、大きな気根を髭のように垂らす樹、自然を敬う心の求めて設けられた拝所であり、信仰と生活は一つであった。昼なお暗く、私共にとっては涼しい、よい涼み場所であった」とある。

同じく尚家関係者で尚泰の四男尚順の『松山王子尚順遺稿』をみると、中城御殿に関しては前述した首里城退去の回想と、「いつし名のくちゆむ豊む中城 すみなれし

人や幾世へても」という琉歌が該当するのみである。

尚寅の孫である尚武秋は『新南島探験 笹森儀介と沖縄百年』において、次のように回想している。

中城御殿の前之御座と御内原は、男の世界、女の世界と、はっきりと区別されていたが子供の私は自由に出入りできた。特に印象に残っているのは、中庭の美しさである。静かな中に、真っ白な石が敷きつめられていて、それはもう背筋がゾクとするほどだった。チフジン御殿（聞得大君）に安室御殿がおられ、祭事が執り行われていた。安室御殿は透き通るような色白の方で、実に神々しかった。最後のチフジン御殿に今帰仁殿（信子様）がついたが、戦乱の中で大変苦労された。私が嫁とる時、士族以外からだったので今帰仁御殿にお世話をかけた。

旧王家一族の日常は、ウフチャンシーメー、ハンチャンシーメー（祖父母）はじめ、父母、長兄に「ウーキミセービティ」と朝のあいさつで始まり、「ウェーシミセービリ」のあいさつで終わる。

沖縄戦の時、中城御殿は日本軍の司令官舎として使われた。そこで私は捕虜としてのアメリカ人を初めて見た。習いたての英語でその米空軍中尉と話し合ううちに友達となった。本来そういうことは許されないが、私は大目にみられていた。笑顔に子供っぽいところがあり、いい人だった。私は副官に、この米兵を殺さないでとお願いしたが、戦況の中で銃殺されたことを後で聞いた。中城御殿の美しさと対比して心に強く残っていることである。

建物内部で男女の世界を明確に区分されていたことは他の回想記録からも窺える。また、断片的であるが沖縄戦時に司令官舎として使用された話は、重要な証言のひとつといえる。

南風原文化センター編『最後の琉球王 尚泰と尚家の人々の暮らし:ある奉公人の証言から』は、明治末から尚家へ奉公にいったカメ吉永大工廻のインタビュー記録である。カメ吉永大工廻自身の証言によれば、彼女は1904年12歳ごろに東京の尚家邸へ奉公に行き、18歳ごろ沖縄に戻ってきたという。本書の中では、尚泰の葬儀に関して特に東京から沖縄への遺体の移送と首里での葬儀について詳細に語られている。

真栄平房敬は戦前から中城御殿に出入りし、多くの関係者や古老の話を記録している。『旧中城御殿関係資料』に収録された「真栄平房敬氏への聞き取り」では、中城御殿内部の詳細や実態が語られている。例えば、「私たちの小さい頃は正門は常時閉めてありました。何故かと言うと、尚昌様は早くお亡くなりになったから、ずっと閉めてありました。世継ぎ様が未成年の時には正門は開けないんです」や「(ウチンビューー、サチノウドゥン)

ここは又、元の世子の御住まい所とつながっていますから、そこから入られないように元の通り道を仕切きってふさぎました。そして御寝廟御殿の所だけから上がれるようにしてありました。改造したんです。王府関係のものがここに移ってきたので、ウーチバラでもこのものは「ウグスク（御城）」と呼んでいました。もともとの中城御殿のものと系統が違うのでそう呼ばれたのです」など重要な回想が記録されている。また、利用実態の側面では、鈴引が首里城のウーチバラに系統がまったく似ていることが指摘されている。さらに真栄平の著書『首里城物語』等での回想記録をみると、沖縄戦直前に中城御殿で保管していた史料や宝物類を避難させたこと、またこれらの史料が戦後間もない時期にすでに隠し場所から無くなっていたことが語られている（『中山世鑑』や『おもろさうし』等その一部はのちにアメリカから沖縄へ返還された）。

福地唯方「首里の信仰祭祀:中城御殿」は、尚静子（尚時の妻）、比嘉豊子（尚時の子女）両氏からの聞き取りを基に中城御殿での年中行事や日々の祭祀儀礼について詳細に記されている。中城御殿での民俗に関する最もまとまった記述である。また、「中城に関する聞書抄」には、エリアについて「中城御殿は建造物の関係というより聖域ともいふべき御内原と俗域ともみられる一般生活圏とに大別される。前者の一带をウク、後者をメーとよんでいる。」と述べる。また、ウクは男子禁制であるが、少年か独身者は立ち入り可能で、女性でも月経の時や妊娠中は侵入禁止であった。この点は先ほどの尚武秋の回想とも関連している。ウクとメーの境には鈴が吊るしてあって引くと奥から出てきて取り次ぐ流れとなっていた。門の使用状況など、ジェンダーによるエリアの区別が厳密であったことがわかる。また、尚静子の話から、中城御殿にかかわる人々も厳密な制約のなかで、日々の運営や祭祀にかかわっていたことが窺えるが、「しかし御内原も昭和九年の野嵩御殿（尚祥子）の死後は時代の新風が吹き抜けるようになって自然に中の雰囲気も変わっていったということだった」と述べるように、近代末期にはその空気感の変化が見受けられる。

この他、主要な回想・来訪記録としていくつか挙げる。金武良章『御冠船夜話』は芸能を中心に金武良章の聞き書きが記録されたものであるが、「尚泰侯ご安骨の夜」、「中城御殿」の三線、「王家日常の言葉抄」、「聞得大君のお人柄」など中城御殿に関する内容も多く含まれている。鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』では、主に中城御殿の建築について伊東忠太の見解を踏まえて詳述されている。ゴールド・シュミット『大正時代の沖縄』では、来訪記録に関連して「その側には、日本のばあいでは重要な位置を占めているはずの武器類がまったくないのが特に

目をひいた。実際に島の人びとは何百年来武器を手にすることがなかったのである。まさに、彼らは東洋で最も平和的な民族だった」と述べており、外からの「琉球イメージ」と中城御殿への来訪が交差する記録となっている。1940年の『工芸』103号に掲載された柳宗悦「首里と那覇」では、「首里に昔のまま尚家の御殿が残るのは沖縄の為祝福に堪えない。本土の各大名は、此のような完全な状態で昔の屋敷を残しているものは殆どない。残っていても一部が保存されているに過ぎない。それに尚家の場合のように今日も日々使われているのみならず、昔の暮らし方迄残っているものは一つもないであろう。沖縄の住宅建築として代表的なものであって尚家だけで立派な一冊の本ができるであろう。此の仕事はいつか当然実現されねばならない」と記されている。また、柳は建築の評価だけでなく、中城御殿の石灯籠に関する詳細な記述も行っている。津軽照子『うら紙草紙』では、建築や建物内部の様子について記録されている。山崎博士『山崎博士 大嶋沖繩遊記』は、内部の様子、絵画、調度品に関して記述されている。

このように関係者の回想からは、中城御殿の利用実態が窺える内容が多く記録されている。また、昭和戦前期においては、民芸運動の影響か中城御殿の建築や美術に関する訪問者の記録が多く残されている。さらに、真栄平房敬や尚武秋による沖縄戦時の中城御殿に関する証言は、非常に重要な証言といえよう。沖縄戦に関しては、第32軍関連の史料から軍事利用の側面について今後調査する必要がある。

参考文献

- ・伊集守道、鈴木優「尚典の葬送について」上杉和央編『沖縄の宗教・葬送儀礼・戦没者慰霊』京都府立大学文学部歴史学科、2019年
- ・沖縄県沖縄史料編集所『沖縄県史料』近代3 尾崎三良・岩村通俊沖縄関係資料、沖縄県教育委員会、1980年
- ・尾崎三良『尾崎三良日記』中央公論社、1991年
- ・鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』岩波書店、1982年
- ・喜舎場朝賢『琉球見聞録』ベリかん社、1977年（初出1914年）
- ・金武良章著編『御冠船夜話』若夏社、1983年
- ・ゴールド・シュミット『大正時代の沖縄』琉球新報社、1981年
- ・近藤健一郎「琉球処分後の沖縄教育：山県有朋『復命書』（1886年）を中心に」『日本の教育史学』36、1993年
- ・後田多敦「琉球国滅亡後の国家祭祀と中城御殿」『南島文化』35、2013年
- ・田丸尚美「近世琉球仏教に関する一考察：王家と上流士族を中心に」（2015年度琉球大学人文社会科学部研究科

国際言語文化専攻修士論文）

- ・津軽照子『うら紙草紙』河北書房、1942年
- ・南風原文化センター編『最後の琉球王 尚泰と尚家の人々の暮らし：ある奉公人の証言から』南風原文化センター、1995年
- ・福地唯方「首里の信仰祭祀：中城御殿」『那覇市史 資料編二巻』那覇市、1979年
- ・藤本仁文「明治三四年尚泰の葬儀と旧琉球王国」上杉和央編『沖縄の宗教・葬送儀礼・戦没者慰霊』京都府立大学文学部歴史学科、2019年
- ・前田勇樹「廃琉置県直後の沖縄県庁運営の実相：首里王府役人の採用をめぐる問題を中心に」『沖縄文化研究』43号、2016年
- ・真栄平房敬『首里城物語』ひるぎ社、1989年
- ・宮里昭也『新南嶋探験 笹森儀介と沖縄百年』琉球新報、1999年
- ・柳宗悦「首里と那覇」『工芸』103号、1940年
- ・山崎博士『山崎博士 大嶋沖繩遊記』1941年
- ・山里永吉編『松山王子尚順遺稿』尚順遺稿刊行会、1969年
- ・琉球政府編『沖縄県史』12巻、国書刊行会、1989年
- ・琉球政府編『沖縄県史』14巻、国書刊行会、1965年